

【第17回年次大会 研究発表 要旨】

英語の「man」と日本語の「マン」

原田邦博

英語を公用語とするアメリカにおいては、PC（ポリティカルコレクトネス）という考え方に基づき、職業名などにおいては「男性」を意味する「man」を、男女共通である「person」などに置き換える表現が定着してきている。

この流れは日本にも広がりつつあるが、すでに「〇〇マン」という様々な言い方が日本語として浸透していたことから、「〇〇パーソン」という表現の使用頻度は必ずしも高いとは言えない。

正確な調査は行われていないが、ネット上の出現数を参考にとすると、比較的定着していると思われることばに「キーパーソン」がある。従来の「キーマン」とほぼ同程度に使用されているが、その背景には「女性の社会進出」があると考えられ、女性に対して「キーマン」という表現はふさわしくないと感じる日本人が増えているためではないかと思われる。

一方、「議長」などを意味する「チェアマン」に対応する「チェアパーソン」という言い方はあまり使われていない。その立場に立つ女性が、日本ではまだ少ないためであろうか。

職業名で言えば、「カメラマン」は、ほとんど日本語として確立している。「フォトグラファー」という名称もあるが、芸術的な「写真家」は別にして、新聞・テレビなどの報道現場では「カメラマン」以外の言い方は耳にしない。

よく「男女雇用機会均等法」では、募集にあたって「〇〇マン」は使用できないと言われていたが、「均等法」の「指針」を詳しく見ると、「営業マン（男女）募集」や「ウエイター・ウエイトレス募集」のように、男女を同等に募集するのであれば、男女一方を意味する表現の使用も可能であるとしている。

このように「〇〇マン」に限らず、男女に関わる日本語表現は揺れ動いている。今後への考え方としては、あくまで日本語（外来語を含む）という枠の中で、「日本版PC」を確立していくことではないだろうか。ここで確認しておきたいのは、それは「アメリカ版」のコピーではないということである。日本語を母国語とする日本人が、日本の文化を反映させた独自の「PC」を作り上げ、共有していく必要があるのではないかと考える。

(はらだ くひろ・元NHK主査/フリージャーナリスト)